

2007年度防災教育チャレンジプラン 最終報告書

記入日 2008年1月30日

1. 概要

実践団体名	特定非営利活動法人冒険あそび場・せんだい・みやぎネットワーク	
連絡先	電話番号	022-264-0667
プランタイトル	防災まちづくり☆親子で体感・体験～生きる力を確かめ合う～	
目的	宮城県沖地震の再来が懸念されるこの頃、かけがえのない命を守るために、自然災害に適応できる知識とコミュニティの大切さを学び、親子で「災害の備え」を考える。学校、家庭、地域でそれぞれ行なっている防災教育や防災訓練で得た知識を、それぞれの年代が持ち寄って「知恵」として活用できるようにする。	
プランの概略	<ul style="list-style-type: none"> * 東北福祉大学地域減災センターと協力し、大学生・地域の人を、子ども対象の防災教育の推進者として育成する (勉強会→ワークショップの実施→自己評価) * 上記の人材及び海岸公園冒険広場近隣の小学校と協力し、子どものための防災・減災体験活動をする * 防災・減災ハンドブックづくりを考えながら事業の検証をする 	
プランの対象	小学校高学年 (プログラムを体験した親子 20組、作成した大人 34人)	
実施日時	【学習会】 ①9月22日 14～16時 ②10月13日 10～12時 【体験活動】 11月24日 10～15時 【自己評価】 12月8日 14～16時	
実施場所	仙台市海岸公園冒険広場、仙台市青葉区中央市民センター、エル・ソーラ仙台	
連携した団体	連携団体の有無	無
	連携した団体	
	連携したきっかけ・理由	
	連携団体へのアプローチ方法	
	連携団体との打ち合わせ回数	
	連携団体との役割分担	

2007 年度 防災教育チャレンジプラン 最 終 報 告 書

2. プランの立案過程

プラン立案 メンバーの 人数と役割	団体内の スタッフ総人数	5名
	外部スタッフの 総人数	2名
	主なメンバーの 役職・役割	<ul style="list-style-type: none"> ●代表理事・担当理事＝全体構想の企画立案・実施、 ●担当事務局＝文書作成、資金管理、広報、渉外、 ●スタッフ担当＝企画実施、スケジュール管理、広報
プラン立案 に要した 日数・時間	立案期間	2007年1月～2007年6月
	立案時間	30時間～
	上記のうち 打ち合わせ時間	約20時間
プラン立案 で注意を 払った点	<ul style="list-style-type: none"> ●子どもの興味や関心・発想を大事にし、大人の好奇心のみですすめない。 ●現代の若者はステレオタイプなものの考え方をしがちなので、発想の転換を促し、個々の能力を引き出す工夫をした。 ●東北福祉大学地域減災センターとの協力関係を作るために、相互理解の場を持った。 	
プラン立案 で苦勞した点	<ul style="list-style-type: none"> ●自分たちの独自性を出しつつ、万人向けのプログラムにするにはどうしたらよいか。 ●異年齢の参加者それぞれの持ち味を活かし、協働することができるようコーディネートすること。 	

2007 年度 防災教育 チャレンジプラン 最 終 報 告 書

3. 実践にあたっての準備

準備に関わった方と人数・役割	団体内のスタッフ総人数	5名
	外部スタッフの総人数	7名
	主なメンバーの役職・役割	<ul style="list-style-type: none"> ●代表理事・担当理事＝全体構想の企画立案 ●担当事務局＝文書作成、資金管理、渉外、広報 ●スタッフ担当＝企画実施、スケジュール管理、広報
準備に要した日数・時間	準備期間	2007年6月～2007年12月
	準備総時間	50時間
	上記の打ち合わせ回数	企画会議5回 理事会3回
教育関係への働きかけ	働きかけた教育関係者・機関名	仙台市立荒浜小学校、仙台市立東六郷小学校、東北大学、東北福祉大学、同地域減災センター、宮城教育大学、宮城大学、東北学院大学、宮城学院女子大学、山形大学
	どのように働きかけたか	各学校の責任者との面談（趣旨説明） 電話・FAXのやり取り
	結果	小学校：児童・保護者へ学校を通して広報することができ、親子の参加者を確保することができた。大学：学生の養成
地域への働きかけ	働きかけた地域の人・機関名	町内会、自治会、授産施設
	どのように働きかけたか	各組織の会長に面談し、趣旨説明をした。 スタッフとしての参加を促した。
	結果	防災に対する地域の不安を聞くことができ、公園の役割のひとつに防災・減災を位置づけることの大切さを確認した。
保護者・PTAへの働きかけ	働きかけた保護者・PTA組織名	
	どのように働きかけたか	
	結果	

2007 年度 防災教育 チャレンジプラン 最 終 報 告 書

機材・教材の準備方法	用意した機材・教材	スタッフ用教材＝東北福祉大学地域減災センター、(財)災害防災センター及び仙台市消防局作成資料 体験用＝スタッフの手作りによるエアテントやティピなど
	入手先・入手方法	【資料】防災関係各機関に問い合わせ、次々と紹介してもらった。
	機材教材の選定理由	【資料】各機関でどのようなものを使い、どのように啓蒙活動をしているかを踏まえたうえで、地域と学校をつなぐプランを作りたかった。 【体験ツール】市販のキットのみに頼るのではなく、身近にあるものを利用して作り出す知恵が大切である、と考えた。
参加者の募集	募集方法	HP、チラシ、ポスター
	募集期間	2007年6月1日～
	参加予想人数	30名
	実際の参加人数	34名
	募集方法の成功点	大学に赴き、説明会を開くことによって、学生へ理解を求めた。
	募集方法の失敗点	一般の募集が、イベント情報だけの掲載にとどまり、マスコミをいかし切れなかった
準備で苦労した点 工夫した点	学生たちと打合せをするための日程調整が困難だった。 実践日までに個人単位で連絡を取りあい、フォローアップをすることで、参画している意識を低下させないようにした。	

2007 年度 防災教育 チャレンジプラン 最 終 報 告 書

4. タイムスケジュール

	プラン立案	実践にあたっての準備	実践
2007 年 5 月	企画推進会議 (法人の理事・事務局で構成)	仙台市消防局、若林消防署、青葉消防署、(財)仙台市防災安全協会、東北福祉大学地域減災センターへ協力要請。	
2007 年 6 月	企画推進会議	スタッフ打合せ① 学生を中心に、NPO 関係者を巻き込み、学習会の準備を進めた。 講師依頼 (松尾氏)	6 月 15 日 参加者募集説明会 6 月 20～25 日 被災地写真とお役立ちグッズ展示会 6 月 24 日 炊き出し訓練
2007 年 7 月	企画推進会議	スタッフ打合せ②	
2007 年 8 月		スタッフ打合せ③ 講師依頼 (青葉消防署、減災センター)	8 月 19 日 仙台市消防局主催「防災・防火フェスティバル」において、防災プログラムの一部を実践
2007 年 9 月		仙台市防災安全協会、東北福祉大学地域減災センターと打合せ。講師打合せ。	9 月 20 日～25 日 写真展 9 月 22 日 学習会
2007 年 10 月	企画推進会議	スタッフ打合せ④ 講師打合せ。 プログラム作成打合せ。	10 月 13 日 講演とワークショップ
2007 年 11 月		スタッフ打合せ⑤ 講師打合せ。	11 月 24 日 親子参加体験
2007 年 12 月			12 月 8 日 事業評価
2008 年 1 月	企画推進会議		まとめ

**2007年度防災教育チャレンジプラン
最終報告書**

2007年度防災教育チャレンジプラン 最終報告書

5. 実践の詳細【A. 素材】 (メインとなる活動を45分1コマとして記入してください)

タイトル				
実施日				
所要時間				
達成目標				
生成物				
進め方 (箇条書き)				
ツール (特別に用意したもの)				
場所				

2007年度防災教育チャレンジプラン 最終報告書

5. 実践の詳細【B. イベント】（メインとなる活動を45分1コマとして記入してください）

タイトル	防災減災学習会		松尾知純氏講演とワークショップ	
実施日	9月22日	9月22日	10月13日	10月13日
所要時間	45分	45分	45分	45分
達成目標	●ボランティア体験談を聞くことによって避難所での支援の仕方を考える。	●消防署で行なっている啓蒙活動を学び、プランづくりの指針とする。	●防災教育に関する知識と、減災の考え方を講師の体験から学ぶ	●個人の考え方を明確にし、更にグループの中でまとめていく。
生成物	時期によって支援の仕方も違うこと、人間の心理をわきまえていないと本当の意味の支援にならない。	自分の身は自分で守るということを一人ひとりが自覚する。	防災の究極の目的は、人命と暮らしを守ることであるが、それには市民主体の自助・共助が重要。	自分の防災意識・知識・行動パターンを認識し、他者ととともに社会の防災力を高めていく。
進め方 (箇条書き)	<ul style="list-style-type: none"> ・東北福祉大学地域減災センターの概要説明 ・ボランティア活動の報告 	<ul style="list-style-type: none"> ・仙台市消防局職員の講話 ・グループ討議 ・全体のまとめ ・講評 	<ul style="list-style-type: none"> ・松尾氏講演 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートへの記入 ・グループ内で発表 ・グループの意見をまとめ、全体発表 ・講評
ツール (特別に用意したもの)	パワーポイント	パワーポイント	パワーポイント	ワークシート
場所	仙台市青葉区中央市民センター		エル・ソーラ仙台	

2007年度防災教育チャレンジプラン 最終報告書

5. 実践の詳細【B. イベント2】 (メインとなる活動を45分1コマとして記入してください)

タイトル	防災まちづくり☆親子で体感・体験～生きる力を確かめ合う～			防災減災学習会
実施日	11月24日			12月8日
所要時間	45分	45分×4	45分	45分×2
達成目標	<ul style="list-style-type: none"> ●プログラムの実践を通して、子どもたちに命を守るコミュニケーションのとり方を教える。 ●子どもの感性から見たプログラムのあり方を検証し、修正する。 ●知識・技術を適切に加工・運用できる思考力・判断力を養う。 			●スタッフとして得た知識や経験を検証し、防災減災ツールの骨子を作る。
生成物	防災減災実践プログラム＝モノづくりに偏るのではなく、人命を守るには何をどのように使うかを考えさせた。非常食についても、アレルギーに対応したものも作ることができた。いずれも、そこにあるもので特別のものではないことを認識させた。			カタログ形式のものを作ることを検討し、試作品を制作中である。
進め方 (箇条書き)	導入：災害を想定する。 何が必要か話し合う。 公園にあるものを使って作る知恵を出し合う。	展開：つくる。(簡易トイレ、ドーム、非常食、等) 試す。(火熾し、火消し、トイレ流し、煙 等)	定着：成果の発表 ・疑似体験の感想 ・思考力、判断力について ・講評	防災知識のまとめ 計画と実践のズレを検証する。
ツール (特別に用意したもの)	コンパネ等エアドーム建設材料、園芸用支柱等簡易トイレ製作材料、その他	減災カルタ、マッチ、スコップ、のこぎり、扇風機、学童用イス、七輪、他		ワークシート
場所	仙台市海岸公園冒険広場			仙台市海岸公園冒険広場

**2007年度防災教育チャレンジプラン
最終報告書**

2007年度防災教育チャレンジプラン 最終報告書

6. 実施後

参加者へのアンケート結果	6月からスタッフとして関わってきた参加者へのアンケートによると、理解度・満足度共に良い結果となっている。宮城県沖地震から29年たち、その頃の子どもが親になっているが、現在の子どもたちに被災体験がうまく伝わっていないという記述があり、風化させてしまいたいという思いがあることにも気づく。今後、それぞれの仕事や市民活動の中で、防災・減災を考えることが、苦痛ではない特別なことではないものにしていきたいと思う。	
成果として得たこと	それぞれの受講生が、学校や地域での避難訓練とはひと味違うプログラムを組み立て、日常生活の中で行なわれることを「防災」と関連付け、災害に遭ってしまったときにも素早く立ち直る技と知恵を学び、選択能力を養うことの重要性を認識することができた。子どもと共に体験することにより、これまでの防災・減災意識を検証することができ、より効果的なプログラムに修正していくことができた。	
成果物	今年度は、時間的にも内容的にも成果物を作るまでに至らないのではないかと、中途半端なものづくりたくない、という思いで、2年越しでの制作を考えていた。若者を積極的に取り込んだ異年齢集団が、今年度は非常に良い相乗効果を生み、ある程度形のあるものが見えてきた。いずれ、教育現場に提供できるよう、カタログ形式で制作を始めた。	
広報方法	広報した先	新聞社、学校（小・中学校、大学）、市民センター、児童館
	広報の方法	紙面掲載依頼、チラシ配布、ポスター配布、説明会の実施
	取材に来たマスコミ	なし
	広報された内容	イベント情報（日時、内容概略）
	成功点	学校に依頼するにあたり、プラン作成の趣旨を説明ができ、冒険遊び場での防災教育に関心を持ってもらえた。教育現場と今後の取り組みにつながりができた。
	失敗点	マスコミに、事前に広報されるような情報提供ができなかった。

2007年度防災教育チャレンジプラン 最終報告書

<p>全体の感想と 反省・課題</p>	<p>授業やボランティア活動に多忙な学生と協働するには、個別対応はとても難しかった。大学側とは詳細な話し合いを何度も行ない、その都度、確認をする必要があると感じた。これは、事業を進めるにあたり大きな課題であるが「関わりを持つ、一緒に考え行動する、発信する」ことの意識を持続させるなかで克服できると考えている。今後、大学（学校）と地域との間を NPO がどのように関わり、繋いでいくかを意識しながら取り組んでいくことで、大きな効果をあげることができると思われる。</p>	
<p>今後の予定</p>	<p>来年度以降の 取り組み方</p>	<p>今回作成したプログラムが、特定の場所や特殊な能力を持つメンバーでないとできない、というのではなく、どの地域や学校でも活用される「防災・減災ツール」として形のある物にし、実用化していきたい。</p>
	<p>ぜひ実施して みたい取り組み</p>	<p>プログラム作成過程で得た知識や情報をまとめ、人材の育成をすすめる。ソフトとハード面を併せた手法で地域における若者たちの役割と関わり方を検証し、プログラムの実践につなげたい。</p>
<p>自由記述</p>	<p>災害時において、子どもは弱者ではなく、むしろ防災・減災の担い手になりえる、という発想の転換から、子どもの防災意識を高めるプログラムの立案ができる人材育成が必要と考えた。そのため、若年層にも働きかけ、異世代が交流しながら企画立案能力を高めることを目標に掲げ、学習することからスタートした。</p> <p>学習会では、実際に避難所で生活した体験談を聞き、どんな時でも人間の尊厳を守らなければ支援とはいえないことを考えさせられた。また、松尾知純氏を講師に迎え、子どものための教育プログラム作成に向けたワークショップを行なった折には、今まで気づかなかった自分の考え方や行動パターンを知り、命を守るための思考力・判断力を養っていくことの大切さを学んだ。実際に子どもたちとそのプログラムを実践し、遊びながら防災・減災意識が高まるような働きかけができたのも、経験や知識のある人との出会いがあったからで、この講座で取得した知識や情報及び成果物を検証し、防災減災ツールを作成していく意欲につながった。</p> <p>上記のように、プログラム作成と同時に、人材育成や防災ツール作りも行うという欲張り企画であったが、各方面への働きかけも功を奏して、「防災教育を実践している団体」としても認知されるようになった。冒険遊び場と防災教育は一見関係ないように思われがちだが、「遊び」も「防災」も特定の場所ではしかできないのではなく、どこでも誰でも実践できる活動として広めていきたい。</p>	